

IL-1, IFN- γ , IL-6, TNF- α で軽度上昇を認めた。骨髓穿刺では有核細胞8.3万/ μ l, 巨核球1↓/ μ l, 大型の異常リンパ球15.6%, 分裂像(+), histiocyte 0.6%で血球貪食像を認めた。骨髓生検では異常細胞は明らかではなかったが、骨髓 block 標本でB細胞性の大型異型細胞を認め、PCRでも免疫グロブリンのH-chainにモノクロナリティーを認め、血球貪食症候群(HPS)を合併したB細胞性リンパ腫(large cell type 病期IVb期)と確定した。

5月31日よりTHP-COP療法を開始した。当患者はB型肝炎キャリアであったため、プレドニンは1コース目だけ使用しラミブジン内服を併用した。1コース目開始後より解熱し、LDHも1コース目終了後は正常となった。2週間間隔で6コース終了後は維持療法を行う事とした。

考察 LAHSではB細胞性は20%以下とされている。リンパ節腫脹を欠き、肝脾、骨髓にびまん性に浸潤し診断困難な例も多い。本例は骨髓穿刺で異常細胞を認め遺伝子検索でB細胞性リンパ腫と確定し化学療法で寛解が得られた。

6) 濾胞性リンパ腫進行例での fludarabine 療法の有用性

一併用化学療法無効で watchful waiting 後に十二指腸浸潤をきたした濾胞性リンパ腫での fludarabine 著効例一

齋藤 弘行・森山 美昭(燕労災病院血液内科)

【目的】fludarabine phosphate (F-ara-AMP)は、低悪性度リンパ系腫瘍に有効性が認められている抗腫瘍剤であり本邦ではCLLのみが保険適応となっている。一方、濾胞性リンパ腫は低悪性度リンパ腫に分類されるが完治は困難で、治療法の選択に苦慮することも多い。化学療法無効で watchful waiting 後に十二指腸浸潤をきたし、F-ara-AMPが著効を示した症例を経験したので、若干の考察を加え報告する。

【症例】50歳、女性。頸部リンパ節生検にて悪性リンパ腫(follicular, medium cell type)と診断された。この時点ですでに腹腔内に bulky mass を認めた。CHOP主体の化学療法を施行されたが効果認めず、watchful waitingの方針となった。約1年後に心窩部痛出現しGTFにて十二指腸へのリンパ腫浸潤を確認、化学療法を施行されたが効果なく当科紹介となった。

当初、MST16/VP16の投与を行ったが無効であったためF-ara-AMP 20 mg/m²×5日/4週の治療法を試みた。現在まで6クール施行し、腫瘍サイズの縮小、十二指腸病変の消失等著効をみているが、2クール後には帯状疱疹の合併をみた。

【総括】F-ara-AMPの保険適応疾患の拡大は、治療法に苦慮するような低悪性度リンパ系腫瘍に対する治療の選択範囲を広げ、患者のQOLを高める可能性が期待される。一方、本症例でもみられたように、高度のリンパ活性抑制による日和見感染等の合併には、十分な注意が必要と考えられた。

7) 高齢者における進行期中高悪性度非ホジキンリンパ腫に対する THP-COP 療法

一当科での治療経験一

廣瀬 貴之・今井 洋介(県立がんセンター) 張 高明(新潟病院 内科)

【背景と目的】非ホジキンリンパ腫(NHL)の治療は、CHOP療法をはじめとする強力な化学療法により高い寛解率と長期生存が望めるようになりつつあるが、高齢者を対象とした臨床研究は少ない。しかし欧米では高齢者に対してもCHOP療法が推奨されつつあり、ADR(Doxorubicin)に代わり心毒性が少ないとされるTHP-ADR(Pirarubicin)を使用したTHP-COP療法が本邦で標準的治療となりうるかを検討するphase I/II studyを多施設共同で行っている。

【適格症例】病理組織でNHLと診断され、intermediate および high grade (WF), I (bulky), II, III, IV期(Ann-Arbor), 年齢70-79歳, PSO-1, 重篤な臓器障害・前治療の無いインフォームドコンセントの得られた症例。

【治療方法】day 1: CPA 750 mg/m² (div), THP-ADR 50 mg/m² (div), VCR 1.4 mg/m² (max 2.0 mg) (div), day 1-5: PDN 100 mg/body. 3週間毎にPDでない限り計6回まで実施。支持療法(抗生剤, 輸血, G-CSFなど)は保険適応内で実施。

【患者背景】当科から12例が登録され、男/女は8/4例、年齢は平均73歳(70-77歳)、II/III/IV期は5/2/5例、B症状-/+は9/3例であった。

【治療効果, 毒性】CR 2例, CRu 3例, PR 4例, PD 3例で、完全寛解率43%, 奏効率75%。プロトコル治療は7例で完遂された。血液毒性は3度以上の白血球/好中球/血色素/血小板減少を10/8/6/4例、非血液毒

性は3度の静脈炎（深部静脈血栓症）、感染（肺炎）、心不全を各1例認めた。治療関連死亡は生じなかった。

【結語】full dose の THP-COP 療法は強い骨髄抑制を生じ得るが、適切な補助療法の併用により比較的 safely に実施可能であることが示唆される。現在、他施設共同研究での登録を終了し、安全性、完遂率、寛解率などを解析中である。

II. 特 別 講 演

「高齢者の急性骨髄性白血病」

東京都老人医療センター血液内科部長

森 真由美 先生

第29回新潟糖尿病談話会

日 時 平成12年3月25日（土）
午後1時30分より
会 場 新潟ユニゾンプラザ大会議室（4F）

I. 一 般 演 題

1) 当科外来における metformin の有効性について

河内 文女・長沼 景子
鈴木亜希子・五十嵐智雄
丸山誠太郎・石川 真紀
上村 宗・金子奈々子
金子 晋・羽入 修
大山 泰郎・中川 理（新潟大学）
相澤 義房（第一内科）

今回我々は、強いインスリン抵抗性を伴う2型糖尿病に BG 剤を使用し抵抗性を改善できた症例を経験した。そこで当科外来で血糖コントロールが不十分な2型糖尿病患者35例を対象として、3カ月以上 metformin を投与し、BMI、平均血圧、HbA1c、TC、HDL-C、LDL-C、TG、HOMA、PAI-1について検討した。投与開始後は有意な HbA1c の低下を認め、3ヶ月後に効果のある症例は6ヶ月後も有効性が維持できた。BG 剤は肥満群に有効とされているが、非肥満群においても HbA1c の改善を認めた。BG 剤はインスリン分

泌を介さず血糖降下をもたらすため、インスリン分泌が低下した2型糖尿病にも効果があると考えられた。今後は BG 剤の二次無効の有無、合併症への影響など長期的観察が必要と思われた。

2) 膵癌を併発した糖尿病の10例

小林 良太・佐々木夏恵
宮島 衛・奥泉 讓
田村 紀子・百都 健（新潟市民病院）
田中 直史（第二内科）

糖尿病の経過中に膵癌が発見された、当科の関係した10症例の特徴を検討した。過半数に腹痛の訴えがなく、急速に血糖コントロールが不良となった例が目立った。糖尿病診断から1年以内に膵癌が発見された2例については、膵癌による二次性糖尿病であったと考えられた。10例中外科的根治術適応は2例のみで、全例完治はしなかった。

当科教育入院患者（'95 - '99）1100例に施行した腹部超音波検査で、9例（0.8%）に膵癌が発見された。一般の膵癌罹患率等から検討し、スクリーニング目的の腹部超音波検査では糖尿病患者は非糖尿病患者に比べ膵癌を発見される頻度が高いと考えられた。

糖尿病初発例、経過中の急な血糖コントロール不良、腹痛や体重減少を訴える例には直ちに膵癌の否定を行う必要があり、日常診療上、血糖コントロール、慢性合併症に対する全身の管理と共に、悪性腫瘍の検索にも一層心がける必要があると考えられた。

3) 多発性筋炎（PM）、重症筋無力症（MG）、胸腺癌を合併した抗 GAD 抗体強陽性の1型糖尿病

佐々木夏恵・小林 良太
宮島 衛・奥泉 讓
田村 紀子・百都 健（新潟市民病院）
田中 直史（第二内科）

症例は61才の女性。家族歴に糖尿病、自己免疫疾患なし。昭和63年、口渇、体重減少、随時血糖 516 mg/dl、尿アセトン体陰性から糖尿病と診断された。グルカゴン負荷6分後の血中 CPR は 1.8 ng/ml と低反応で、当初からインスリン治療を継続。平成6年12月全身の筋肉痛出現、筋力低下、CPK、LDH の上昇、EMG、筋生検より多発性筋炎と診断しステロイド投与を開始した。平成8年3月より夕方に眼瞼下垂あり、MG が疑われたが EMG が非典型的で確認がつかず経過観察。平成